

【小特集】 WTO 加盟交渉プロセスで現れた西側の誤解（特別セッション報告）

特集に当たって

渡邊 真理子

中国経済経営研究

第9巻第1号

[通巻17号]

2025年4月

〈別刷〉

【小特集】WTO加盟交渉プロセスで現れた西側の誤解（特別セッション報告）

特集に当たって

渡邊 真理子

本年度の全国大会では、第2日目のランチタイムに特別セッションを設ける試みを下記の通り行った。午前と午後の自由論題の間に学会員が関心をもつ講演を設定し、大会プログラムの内容をより豊かにすることを意図した。

日時：2024年12月1日（日）

12：00～13：20

場所：京都大学吉田南 1 号館 3 階・1 共
31 教室、Zoom 併用

テーマ：「“社会主義”、“重商主義”還是“異文化”？— 一世貿談判中の西方誤区—（社会主義、重商主義、それとも異文化か？：WTO 加盟交渉プロセスで現れた西側の誤解）」

講演言語：中国語

講演者：秦暉（清華大学・名誉教授）

第1回にあたる本大会では、演者として清華大学名誉教授の秦暉氏を招へいし、「WTO加盟交渉プロセスに現れた西側の誤解」と題する講演をいただいた。

現在、米中対立が激しくなる中、米国は中国の経済体制が国際貿易をゆがめているという批判を強めている。秦氏は、その体制の問題とはいったい何なのか、社会主義なのか、重商主義なのか、それとも文化の違いなのか、という問

題設定のもと、中国の実際の体制に関する西側の誤解の例をいくつか挙げて指摘した。

たとえば、1990年代のWTO加盟交渉の際に、アメリカと欧州・日本の間で農業向けの補助金をどこまで下げるかという交渉がすすんでおり、中国の加盟交渉の際にもそれが最後まで残る交渉の争点となった。しかし、実際のところ中国の当時の農民は、税费改革の前で、国家から補助金を受け取るどころか、多額の税と費用を国家に提供する「負の補助金」を受取っていた。中国が、米国に対して高い補助金率の維持を主張したのは、WTOの交渉の場で途上国のリーダーとしての地位を確保するためだったと指摘している。その後、WTOの制度のもとのグローバリゼーションのもと中国は目覚ましい経済成長を遂げたが、その強い競争力の源泉は、実は人権保護のコストを回避することで実現している「低人権の比較優位」であったという見方を示した。この「低人権の比較優位」は、中国だけでなくアパルトヘイト時の南アフリカにも共通する性質であることを指摘している。

講演後、多くの質問が出され、講演時間ギリギリまで活発な議論が交わされた。

本稿は、講演後に確定した発表稿の日本語訳である。

（わたなべ まりこ・学習院大学）